池田市の沿革及び地勢

池田市は、大阪市の都心部から西北へ約 16 キロメートル、大阪府の西北部に位置し、面積は 22.14 平方キロメートルである。

市域の約 3 分の 1 は山地で、市の中央部は五月山が占めている。

池田市域には、古くから人が住みついており、五月山山麓などで旧石器時代の遺物が発見されている。

古墳時代から奈良時代には、渡来系氏族の秦氏が居住し、池田市域は秦上郷、秦下郷、豊島郷と呼ばれた。室町時代には、土豪の池田氏が大きな勢力を持つようになり、この頃から「池田」という地名が生まれたといわれている。

江戸時代には良質の水を生かした酒造業が発達した。また交通の要衝であったため、能勢地方と大阪との物資流通の中継地点となり、商業が栄え、文化の進展が顕著であった。

明治 22 年、町村制の実施に伴い、池田村は池田町となり、昭和 10 年、池田町、細河村、北豊島村、秦野村の 1 町 3 村が合併して池田市の前身である池田町が誕生した。さらに昭和 14 年 4 月 29 日、人口約 3 万 6 千人をもって、大阪府下で 6 番目に市制を施行し、平成 31 年 4 月に市制施行 80 周年を迎えた。

この間、明治時代には金融機関、商店、官公庁が相次いで設立されたほか、明治 43 年に箕面有馬電気軌道（現在の阪急電鉄宝塚線）が開通し、大正から昭和にかけて宅地の造成が行われるに至って、住宅都市としての道を歩み出した。

戦後は、道路・公園・下水道をはじめとする施設整備に力を注ぎ、昭和 30 年代における住宅団地の建設もあって人口は昭和 40 年代前半にかけて急増し、昭和 50 年には 10 万都市となったが、それ以降は横ばい状態である。

現在、市域のうち五月山山系以南は、ほとんど市街化されており、農地は北部の細河地区だけになりつつある。

中央部の阪急池田駅及び石橋阪大前駅周辺には商業施設が集中している。また、南部には自動車工業及び関連産業が多く立地しており、これら産業の流通を担う国道 171 号、176 号、423 号、中国自動車道、阪神高速道路、府道中央環状線などの幹線道路が集中しているほか、周辺地域においては新名神高速道路の開通により高速道路ネットワークも充実しており、さらには市の南端に大阪国際空港があり、交通の要衝としての役割を現在も担い続けている。

本市では、市政の効率化と財政の健全化に取り組みながら、「安全・安心のまち」はもとより、「福祉のまち」「教育のまち」、そして「子育て支援のまち」池田として、各般の施策の発展に努めてきた。

このような背景のもと、直面する財政危機を回避するだけでなく、人口減少時代に対応できる安定的な行政組織を確立するとともに、平成 18 年 4 月には、本市のまちづくりにおける基本理念を定めた「池田市みんなでつくるまちの基本条例」を施行し、翌平成 19 年 6 月にはこの条例の理念である市民と市の協働によるまちづくりを行う具体的な仕組みとして「池田市地域分権の推進に関する条例」を制定した。そして、「自分たちのまちは自分たちでつくる」といった考えのもと、市民自らがそれぞれの地域において自主的・自立的に夢や希望を語り合い、課題を解決できる地域社会の実現を目指しており、池田発・全国初の地域分権制度をより定着させ、池田市が日本の新しい地方自治のモデルとなるようさらなる地域分権の確立に努めている。

第 7 次総合計画では、めざすまちの将来像として

笑顔あふれる豊かな暮らしを未来につなぐ

みんなが大好きなまちを掲げ、

「『だったらいいな』を叶える いけだ」の実現に向けた取組を進めている。